

ふるさと研究ニュース

2009年11月 第5号

所沢市生涯学習推進センター
ふるさと研究担当



「ふるさと研究活動」は、子どもからおとなまで、幅広い世代の市民のみなさんの参加により、ふるさと所沢の自然・歴史・芸術・文化・産業など、様々な分野の資料や情報を集め、調査・研究を深めてゆく活動です。「所沢のことをなんでも知りたい！」方のご参加をお待ちしております。

秋季展示第2会場

平成21年11月4日～11月15日

月曜祝日を除く9時～17時

東の上遺跡発掘の軌跡

— 所沢市文化財指定記念特別展 —



南住吉と久米に位置する東の上遺跡は、東西約1km、南北約300m、面積は約30万㎡におよぶ市内最大級の遺跡です。昭和50年に最初の調査が行われ、これまでに多くの遺構・遺物が発見されてきました。旧石器時代から中世までの複合遺跡であり、時期によっては周辺の拠点となる集落であったことがわかっています。また、それまで大学や県によって行われてきた発掘調査が、市の教育委員会を主体として本格的に実施されるきっかけとなった遺跡でもあります。

全国的に知られるに至った第36次調査の道路跡（東山道武蔵路）、第53次調査で発見された「漆紙文書」、弥生時代の集落と墓の区域の関係を明らかにした方形周溝墓など、88回を数える調査の中で多くの成果が得られています。また、墨書のある土器が数多く発見されたり、竪穴住居とは異なる掘立柱建物跡の発見や、それらを区画する溝の特別な用いられ方などから、役所のような施設がこの場所に存在したことが想定されています。

発掘された土器の形式やその材料、遺構の重なり具合など、調査の成果の分析によって、わずかしか伝わらない文字資料の記述を確認したり、その隙間を埋めたりすることができます。古代の所沢の一面を明らかにする発掘調査、その奥の深さにぜひ触れてみて下さい。

体験イベント まがたまを作ろう

10月31日の第9回生涯学習フェスティバルにあたり、企画展示の関連イベントとして開催した「まがたまを作ろう」では、幼稚園の年長さんから60歳以上の方まで、慣れない砥石ややすりに悪戦苦闘しながら、柔らかめの高嶺石でそれぞれ好みの形の勾玉を作りました。（3階体験実習室）



11月にご覧いただける展示など

場 所	内 容
企画展示室	ところざわ発掘物語 ～ようこそ古代の所沢へ～ 11月15日(日)まで
304学習室(企画展示第二会場)	東の上遺跡発掘の軌跡 11月15日(日)まで
常設展示室	所沢の歴史・昔の暮らし・自然など
メモリアルルーム	並木東小学校の「記憶」
南棟3階階段脇掲示板 ミニ写真展	小手指地区の移り変わり part1 11月10日(火)まで 小手指地区の移り変わり part2 11月11日(水)から
3階中央棟廊下壁 今月の航空写真	東の上遺跡周辺(企画展示第2会場と連動) 11月30日(月)まで

所沢市生涯学習推進センター ふるさと研究担当

Tel:04-2991-0308 Fax:04-2991-0309 Mail:b29910308@city.tokorozawa.saitama.jp



ふるさとと研究自然だより

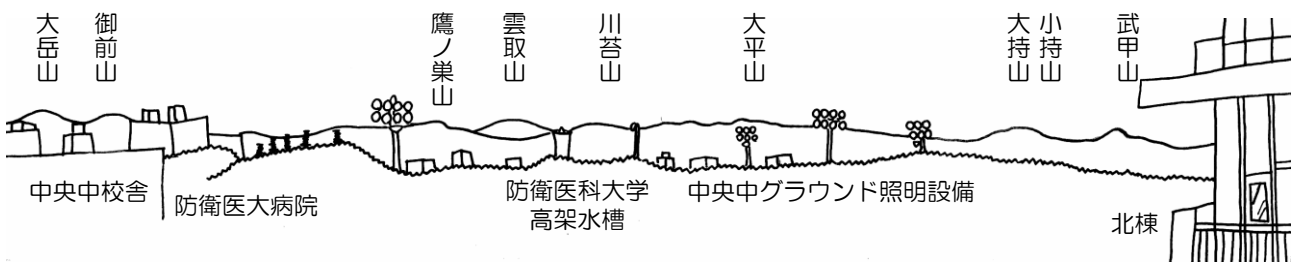


その2 センターから見える山々

空気が澄み眺望が利く季節がやってきました。武蔵野台地から遠く望む山々は、所沢に暮らす人々にとってふるさとを象徴する風景のひとつです。基地跡地の東端に位置する当センターからも、西方の奥秩父や奥多摩の山々を中心に、名だたる名山を望むことができます。

3階中央棟の窓からグラウンド越しに西を望むと、まず右からは、北棟の軒ぎりぎりに、奥武蔵の盟主武甲山（1295m）が見えます。石灰岩採掘のため痛々しく削られた右肩が特徴です。続いてその尾根伝いの小持山（1273m）大持山（1294m）、一段低いのは烏首峠（とりくびとうげ）です。しばらく細かなピークが続き、一際遠くに霞むのは雲取山（2017m）、左に鷹ノ巣山（1737m）が見えます。左下がりの稜線が防衛医大病院に隠され、やがて中央中の校舎の向こう側に、御前山（1405m）と大岳山（1267m）の姿が現れます。3階からは南棟に隠されて見ることはできませんが、その左には、大菩薩嶺（みとうざん）、そして富士山、丹沢の山々、神奈川県（おおよま）の大山などが続きます。

秋の日はつるべ落としの言葉どおり、好天の日、午後4時を過ぎると、空は見る間に茜色に染まります。残照が濃紺の山のシルエットをふちどる風景はことのほか美しいものです。日中の青々とした山、夕刻の山、お好みの風景を当センターからもお楽しみ下さい。



勝楽寺と勝楽縞

ふるさと研究市民トピック vol. 5

「勝楽寺（しょうらくじ）」といえば、山口貯水池建設の際に湖底に沈んでしまった地区を思い浮かべます。江戸時代は勝楽寺村といい、明治35年に合併して山口村大字勝楽寺となりました。昭和初年の貯水池建設により地域のほとんどが水没することになったのです。

勝楽寺の地名の由来は、現在は移転して西武鉄道狭山線下山口駅の近くにある仏蔵院勝楽寺という寺院があったことに由来します。創建年代は古く奈良時代と伝えられ、かつては大寺院でしたが、鎌倉幕府打倒の祈願をしたとして時の執権北条氏の怒りを買ひ、ほとんどが焼き払われたとされます。（『所沢市史地誌』より）

さて、勝楽寺地区ではかつて織物生産が盛

んでした。とくに縞の生産は明治39年にはピークに達していました。農家の余業として織られていたわけですが、一昨年、元機屋であった家から織物資料として「可津良縞」と墨書された木箱と商標が発見されました。「かつら縞」と読みます。機屋のブランドとして織られていたのでしょうか。その後同じく所沢町金山（明治時代）にあった縞屋で現在は入間市に移転した家から「勝楽縞」という商標が刷られた包装紙が発見されました。こちらも「かつら縞」のブランド名だったと思われませんが、先の機屋から発見された商標の読み方からこれを「かつら縞」と読むことが推測されます。「勝楽」と書いて「かつら」と読ませる。昔の人のアイデアを垣間見る思いがしませんか。